

農業技術情報

2019年4月25日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128
JA幕別町 0155-54-4118
JAさつない 56-2131
JA帯広大正 64-4591
日甜幕別原料事務所 54-2756
幕別町農林課 54-6605

<麦類>

1 秋まき小麦

(1) 2019年産きたほなみの生育状況と追肥判断

大幅に早い起生期に続き、幼穂形成期も9日早く迎えました(表1)。地域やほ場、は種時期によりほ場間差はありますので生育状況を確認しましょう。

生育状況に応じた窒素分肥については前回技術情報および表2を参照してください。

表1 きたほなみの生育期節(幕別町)

生育期節	2019年	平年値	早 晩	
起 生 期	3月23日	4月5日	13日早い	※起生期:春季に至り40~50%が生長を開始し、葉の起立し始めた日
幼穂形成期	4月26日	5月5日	9日早い	※幼穂形成期:主稈の幼穂長が平均2mmに達した日

表2 きたほなみの幼穂形成期窒素分肥量の目安

小麦ほ場の状態(4月下旬時点)		窒素施肥量	備考
茎数 2,000本/m ² 以上	平年並の葉色	分肥を控える	起生期~幼穂形成期の合計分肥窒素量は <u>8kg/10a以内</u> とする
	黄化が激しい場合	2kg/10a程度	
茎数 2,000本/m ² 未満	平年並の葉色	2~4kg/10a	
	黄化が激しい場合	4~6kg/10a	

(2) 雑草対策

融雪が早く、小麦の生育ステージが前進しており、今後の地温上昇によって雑草の発生も早まることが懸念されます。は種後に除草剤を未散布、または連作ほ場はとくに注意が必要です。表2を参考に除草剤散布を検討しましょう。散布に当たっては適正使用に努め、薬害の発生に注意しましょう。

表3 麦類の除草剤使用例

薬剤名	処理方法・使用時期・10a使用量		回数	主な対象雑草の効果						備考
	秋まき小麦 (春期)	春まき小麦		シ ロ ザ	タ デ	ハ コ ベ	ツ ユ ク サ	コ ナ ウ ギ ナ ユ タ	ス カ シ タ ゴ ボ ウ	
エコパート フロアブル☆	止葉抽出前まで (収穫45日前) 50~75ml	麦の2~4葉期 (収穫45日前) 50~100ml	2	◎	◎	◎	×	◎	◎	展着剤、殺虫・殺菌剤と混用し まい。高温時に使用しない。
MCPソーダ塩	麦の幼穂形成期 (収穫45日前) 300g	麦の5葉期 (収穫45日前) 200~300g	1	◎	○	◎ ○	○	◎	◎	晴天高温時に散布する(日中 20℃以上)
バサグラン液剤	麦の幼穂形成期 (収穫45日前) 100~150ml	麦の5葉期 (収穫45日前) 100~200ml	1	◎	◎	◎	△	○	◎	散布後の降雨により効果が劣 る。雑草が大きくなると効果が 劣る。
ハーモニー75 DF水和剤	麦の幼穂形成期 (収穫45日前) 広葉雑草 7.5~10g ギンギン類 3~5g	麦の3~5葉期 (収穫45日前) 3~5g	1	◎	◎	◎	△	○	◎	ギンギン類には処理後3週間か ら効果が現れるが、効果の完成 には7~8週間を要する。散布 後は専用洗浄剤を使用する。

☆本年は生育が早まっており、止葉抽出も平年より早まることが予想されるので、使用時期には十分注意する

2 春まき小麦

(1) 生育状況(春よ恋)

作況ほ場は4月11日は種、4月26日に出芽期見込みです。雑草対策をする場合は、H31版防除ガイド(オレンジ色の冊子)p13~14を参考に、除草剤を適期に散布してください。

3 小麦成長調整剤の使用

特に秋まき小麦は茎数過多のは場も見られます。倒伏が懸念される場合は茎稈伸長抑制剤の散布も検討しましょう(表4)。

表4 茎稈伸長抑制剤の使用例

薬剤名	使用時期		使用量 (ml/10a)	使用回数	備考
サイコセルPRO	秋小麦	幼穂形成期	150~200	1	・散布時期が遅れると効果が劣る。 ・高温時は薬害が発生する恐れがあるため 夕方に散布する
		出穂前20~10日 (草丈40~60cm)	200~300	1	
	春小麦	麦の6葉期前後 (草丈30~40cm)	200~300	1	
エスレル10	秋小麦	止葉期~出穂始期	200~333	1	30%以上の出穂をみてからでは倒伏軽減効果が劣る場合があるので適期に処理する
	春小麦				
カルタイム フロアブル	秋小麦	止葉期~出穂始期	150	1	過度な抑制を避けるため、使用時期・使用量を厳守し、多量散布や重複散布とならないよう注意する
	春小麦				

< 豆類 >

1 は種の準備

(1) 種子に合ったは種板を準備

必ず使用する種子の大きさを確認し、目標とする栽植株数となるよう（表5）粒大に合ったは種板を準備しましょう。

表5 栽植密度の目安（明日の豆作り）

区分	栽植密度(株/10a)	畦幅×株間の目安(cm)
大豆:大粒(ユキホマレ等) 小粒(ユキシズカ等)	8,300 12,500~16,700	66×18、60×20 66×12~9、60×13~10
小豆、菜豆	8,300	66×18、60×20

(2) は種適期

は種は地温が十分に上がり（10℃以上）、遅霜の影響がなくなる時期になってからとします。地温が上がらず土壤水分が高いと出芽まで時間がかかり、タネバエの被害が懸念されます。

(3) 種子消毒

- ① ダイズわい化病は、ジャガイモヒゲナガアブラムシが媒介して発生します。春先からの気温が高いと有翅虫の飛来が早まります。
- ② タネバエは牧草地跡や未熟有機物施用ほ場、土壤水分が高いほ場で多発します。発生が懸念される場合には、種子粉衣を実施しましょう。

*薬剤による種子消毒を徹底し、欠株や生育遅延を回避しましょう（表6）

表6 豆類種子処理剤例

薬剤名	60 使用 量 あたり (種子)	回数	対象病害虫										
			大豆					小豆・菜豆					
			立枯病	苗立枯病	紫斑病	タネバエ	ジャガイモヒゲナガアブラムシ	立枯病	褐斑細菌病(小豆)	かさ枯病(菜豆)	タネバエ	アブラムシ類	
クルーザーFS30	360ml	1				○	○					○	○
クルーザーMAXX	480ml	1		○	○	○	○	○				○	○
チウラム80	120~300g	1	○					○					
粉衣用ペアーカスミンD	180g	1		○		○			○	○	○	○	

*「クルーザーFS30」を使用する場合、「チウラム80」と必ず併用する。

*「クルーザーMAXX」は「クルーザーFS30」より乾きにくいいため、特に小豆・菜豆は早めに準備する。

*「粉衣用ペアーカスミンD」は大豆の斑点細菌病、「クルーザーMAXX」は小豆の茎疫病、菜豆のリゾクトニア根腐病にも登録あり

(4) 根粒菌の接種

未接種の種子には、消毒後、最後に根粒菌を接種します。

処理は **クルーザー → 殺菌剤 (MAXXは不要) → 根粒菌** の順で行ないます。

< てん菜 >

- ・強風や、翌日低温が予想される場合、移植作業に注意しましょう。
- ・降雨後、無理な定植や播種作業は控えましょう。
- ・風害・湿害対策のため畦間サブソイラー・深耕カルチを施工しましょう。
- ・移植栽培と直播栽培で登録内容が異なるので、除草剤は防除ガイド（オレンジ色の冊子）を参照し適期に使用しましょう。

野 菜

< ながいも >

1 催芽後半管理

- ・1日1回、酸欠にならないように換気を行いましょ。
- ・催芽中に青かびや腐敗いもが発生した場合は、出来る限り早く罹病株を除去して感染拡大を防いでください。

2 順化

- ・芽が大豆程度の大きさになったら催芽を終え、順化处理を行います。涼しい日陰の場所へ移し、外気の状態に慣らしてください。その際、青シートで覆うなど、芽が乾燥しすぎないように注意してください。
- ・順化温度は10℃、期間は3～10日間が目安です。12℃以下になると芽の伸長はほとんど停止します。
- ・温度と湿度管理に注意し、1日1回は被覆資材を開けて換気を行いましょ。

3 芽が長くなった場合の対策

- ・芽が長くなりすぎた場合は、芽を早めに除去し、再び催芽を数日間行ってから植え付けると収量の低下を最小限に抑えることができます。

4 pH調整

- ・土壌分析値のpHが目標値(6.0)を下回る場合は、石灰資材の施用により目標pHまで矯正してください。

5 耕起

- ・ほ場が湿潤な時に深耕すると碎土率が低下し、植え付け溝の陥没や空洞が発生しやすくなるため注意してください。

6 植え付け作業について

- ・植え付け作業は、地温が10℃以上になってから開始しましょ。
- ・植え付け時の芽の位置は、収量品質に大きく影響します。植え付け溝に対して芽が「斜め下向き」になるよう植え付けてください。
- ・覆土は、5～6cmになるよう植え付けしてください。深すぎると萌芽の遅れ、浅いと乾燥による芽痛みにつながります。
- ・植え付け後は、初期生育促進のためにマルチを張ってください。

< ごぼう >

1 ほ場の深耕について

- ・ほ場が湿潤な時期に深耕すると碎土率が低下し、発芽不良や岐根(きこん)となるため注意してください。

2 は種作業について

- ・地温が10℃以上になってから、は種を開始しましょう。
- ・発芽を揃えるために、は種深度は2～3cmとします。
- ・は種位置、施肥位置が深耕施工位置からずれないようにします。
- ・は種後は、鎮圧を実施しましょう（乾燥時の発芽率を高めるため）。

3 除草剤の効果を高めるために

- ・除草剤の処理層の形成には土壌水分が必要なので、ほ場表面が湿っている時に散布すると効果があります。
- ・アグロマックス水和剤は、薬害回避のため、発芽時の地割れが発生する前までに処理を行いましょう。

表1 ごぼう除草剤の使用基準

薬剤名	処理方法及び使用時期	使用回数	10a当薬量
アグロマックス水和剤※	全面土壌散布 は種後発芽前 (雑草発生前)	1回	200～300g

※砂土では薬害を生じる恐れがあるため、使用を避ける。

< だいこん、にんじん >

1 だいこんの抽^{だい}苔対策と生育促進

- ・だいこんは一定期間、13℃以下の低温にあたると花芽が分化し(は種後～子葉展開時が最も敏感)、その後、高温長日条件で抽苔が促進されます。
- ・一方、低温感応しても22℃以上の高温に遭遇すると、花芽分化が打ち消されるため、べたがけ資材による被覆を行いましょう。

2 にんじんの抽^{だい}苔対策と生育促進

- ・にんじんは、一定の大きさになってから4.5～15.0℃の低温に25～60日間さらされると花芽が形成され、その後20℃前後の高温と長日条件で抽苔が始まります。べたがけ資材を活用し、生育初期の温度を確保してください。

< 葉菜類 >

1 葉菜類のほ場準備

- ・排水不良ほ場では生育不良になりやすいため、定植前にサブソイラ等で排水対策を行ってください。
- ・石灰欠乏対策として、ほ場pHは6.0を目標に矯正を行ってください。

2 育苗期後半の管理

- ・定植前にハウスの開放などにより順化させ、徐々に苗を外気にならしめよう。

3 葉菜類の害虫対策

- ・定植当日にジュリボフロアブル200倍液をセル成型トレイにかん注してください。

表2 コナガの防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期	使用回数 (以内)	注意事項
ジュリボフロアブル	200	育苗期後半～ 定植当日	1回	セル成形育苗トレイ 1箱あたり0.5ℓ かん注(1回)

4 葉菜類の定植について

- ・苗の植付深度は、乾燥や低温を考慮してセル培土が見えず、子葉が埋もれない程度の深さで行ってください。
- ・ほ場が乾燥している場合は、地際部の鎮圧をていねいに行ってください。

< たまねぎ >

1 目標苗質

- ・葉数2.7～3.5葉、根数12～15本を目標苗質とします。気象条件により活着や初期生育の遅れにつながるため、幼苗(2.5葉未満)での移植は避けましょう。

2 移植作業について

- ・苗の発根および活着に好適な地温は10℃以上です。地温上昇を確認し、定植作業を行いましょう。
- ・極端な浅植え、深植えは活着不良となるため、2cm前後で植えてください。
- ・ほ場が乾燥している場合は、3cm前後で植えて、鎮圧を強く行ってください。

3 除草剤の注意事項

- ・土壌処理は、活着を確認し、気温が低く土壌水分のある条件で実施してください。
- ・キク科雑草の多いほ場では、グラメックス水和剤は効果があります。ただし、葉害が出やすいため、気温の低い夕方に処理してください(5月下旬までに)。また、砂土や水はけのよい土壌では使用を避けましょう。

表3 たまねぎ除草剤の使用基準

薬剤名	処理方法 及び使用時期	使用回数	10a 当薬量
ゴーゴーサン乳剤※1	全面土壌散布 定植後(雑草発生前) 但し、収穫30日前まで	1回	300～500 ml
モーティブ乳剤	全面土壌散布 定植後(雑草発生前) 但し、定植30日後まで	1回	200～400 ml
グラメックス水和剤※2	定植活着後(雑草発生前) 但し、収穫90日前まで	1回	30～50g※3

※1：モーティブ乳剤と同一成分を含むため、どちらか一剤の使用に限る。

※2：キク科雑草に効果が高い反面、葉害リスクも高い。

※3：葉害を回避するため薬量を30～50g/10aとし、涼しい時間帯に使用する。

4 タマネギバエ防除

- ・葉切り処理により切除した茎葉は、タマネギバエの発生源となりますので、ハウスやほ場の周辺には放置せず処理してください。補植後、不要になった苗も処理してください。また、雑草の除去など、環境の清掃に努めてください。
- ・ほ場の土壌水分が多いとタマネギバエの発生が多くなりますので、成虫を確認したらダイアジノン乳剤40で防除してください。
- ・被害株は隣接株への食害を防ぐために抜き取りし、ほ場外で処理してください。

表4 タマネギバエの防除薬剤例

薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
カルホス乳剤※ ¹	500~1000	定植前※ ²	1回
ダイアジノン乳剤40	700	収穫21日前	2回

※1：後作利用を予定している苗床での使用は控える。

※2：箱あたり500mlを、かん注処理(使用土壌2ℓ)

○春の農作業事故防止

- ★春の農作業事故は、機上作業中に足を滑らせ落下する例や機械の乗降時に滑り落ちる例、トラックのアオリで手や指を挟む例が多く見られます。
みんなで声をかけあい、安全作業を心がけましょう！



○周辺作物への飛散防止の徹底

- ★除草剤散布など、スプレーヤを使用する作業が増える時期です。
隣接する作物に除草剤などの農薬が飛散すると、生育が大きく阻害されたり、定められた残留基準を超える農薬残留が検出されることがあります。トラブルを回避するためにも、風の向きやドリフト低減ノズルを使用するなど、周辺作物への飛散に十分注意しましょう。
- ★散布後のスプレーヤの洗浄はしっかり行いましょう